

日本人就学前幼児が習得した英語力の特徴 —母語力および親の支援との関係—

Characteristics of English Ability Attained by Japanese preschoolers: Its Relationship to L1 Development and Parental Support

豊田ひろ子

Hiroko TOYODA

東京工科大学

Tokyo University of Technology

Abstract

This study presents and analyzes some characteristics of English ability of seven Japanese preschoolers (aged 3 to 5), who studied English as a foreign language with their Japanese parents at home by using *Worldwide Kids English* home learning materials. Their home learning activities were video-taped and observed at the time of the 20th month after they started to learn English. All of them sounded native-like, and they were good at responding in English by using such conversational chunks as ‘Okay,’ ‘Hello,’ ‘Here you are,’ ‘Thank you.’ Younger learners were good at mimicking English words. At the age of four, two out of three learners used a communication strategy (i.e., saying ‘This.’ to respond) and a learning strategy (i.e., singing English songs to enjoy English learning) respectively. Older learners seemed to learn English vocabulary more effectively. At the age of five, one learner’s English utterances declined while the other started to speak English in full sentences. During English activities, all the children spontaneously used Japanese to express feelings and thoughts, e.g., if they were talking to themselves. Overall, though, their Japanese was not mixed with English. Parents were not fluent in English but were good at playing with their children in English and explaining meanings in Japanese. In sum, with good parental support, the preschoolers mastered English conversational chunks. There was no sign that studying English hindered their Japanese development. If the children receive further support, they will likely learn to express feelings and thoughts in English too.

Keywords

Preschoolers, English as a Foreign Language, Mother Tongue Development

1. はじめに

就学前幼児が、家庭用通信教材を用いて英語学習に取り組む様子を録画データによつ

て観察し、年齢別に英語力の特徴を調査した。英語力に関係のある要因として、子どもたちの母語力、親の支援に注目し考察した。子どもたちは、3歳児2名〔男児1名、女児1名〕、4歳児3名〔男児2名、女児1名〕、5歳児2名〔男児1名、女児1名〕であった。全員日本語を母語とする両親に育てられており、英語学習支援者は主に父親ではなく母親であった。家庭用通信教材は、(株)ベネッセコーポレーションが制作・出版した『Worldwide Kids English』の教材であった。調査当時、子どもたちは、DVD、CD、CD-ROM、絵本、玩具教材(カードリーダー、ブロックなど)、その他(ワークシヨップ、イベント・シヨール)から構成される、このマルチメディア型パッケージ教材を用いていた。家庭における親子学習という形で、20ヵ月に渡り英語学習を継続しており、2年間で全6ステージ中5ステージ(1ステージ分の教材は4ヵ月毎に郵送される)を使用していた。調査データはステージ5学習終了時の学習の様子をビデオに録画したものであった。

以下、まず「子どもたちの英語力の特徴」に関して述べ、「母語力」「親の支援」との関係について、主な観察結果を提示し考察を述べる。

2. 子どもたちが習得した英語力の特徴

2.1 観察結果

英語学習開始20ヵ月後の英語学習時の録画データに基づき、それぞれの子どもたちの学習の様子から英語力の特徴を観察した。レーダーチャートは異なるメディア教材を使って学習していた各学習者の場面毎の発語割合を示す。

表1 就学前幼児の英語力の観察記録

*レーダーチャートの項目は学習場面における使用教材を示す：DVD=DVD、PB=絵本、MT=ミニテスト教材(カードを使った語彙テスト、E-Toyを使った会話テストなど)、E-Toy=音の出ない玩具教材(ネイチャーブロックなど)、P-Toy=音の出る玩具教材(カードリーダーなど)。数値は各教材使用場面での発語数(単位：語)を示す。

| 年齢 レーダーチャート* | 英語力 | |
|--------------------------|---|--|
| | 受容面 | 産出面 |
| ■3歳 A[男児] | 乗り物が好きで、DVDで乗り物が出ると自分の乗り物玩具を持ってきて集中して聞いている。DVDや母親との英語遊びで楽しくなると、日本語でコメントする。走り出すこともあった。 | あいさつなど英語の受け答えが自然にできる。英語で誘いかけるとOkay.と答える。What's this? に対して答えが分かれば即単語で答える。母親に指さしを手伝ってもらい、絵で描かれたものを24まで数えられる。英語ではないが、英語っぽく聞こえるように文を作り出して言うことがあった。 |

表1(続き) 就学前幼児の英語力の観察記録

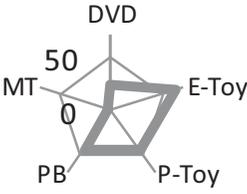
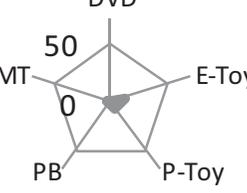
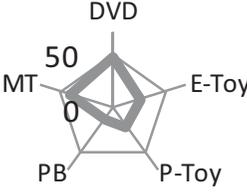
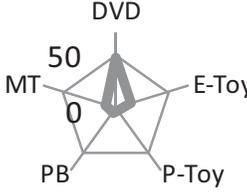
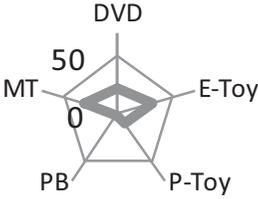
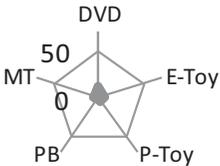
| | | |
|--|--|--|
| <p>■3歳 B[女兒]</p>  | <p>DVD でダンスがあると母親と一緒に踊る。絵本を読んでいる、母親に英語で質問されると英語や指さしで正確に答える。ユーモアを笑って楽しむ。DVD のスキットを楽しんで見る。母親が絵を指さして英語を言うと、それを見て(意味を意識しつつ)真似して言う。</p> | <p>あいさつなど英語の受け答えが自然にできる。CD-ROM の語彙学習で聞こえてくる英単語を、単数と複数の区別をつけて、きれいに真似して言える。絵本にある複雑な句 (grey-haired grandma など) も言える。What's your name? に対してフルセンテンスで答えられる。Why? に対して Pretty because. と答えた。</p> |
| <p>■4歳 C[男児]</p>  | <p>DVD や絵本で興味を持ったとき日本語でコメントする。butterfly と bee を混同する。英語で問題を出すと、正しい絵などを選べる。</p> | <p>自分が好きな虫の名前を英語で言う。天気を英語で言える。</p> |
| <p>■4歳 D[女兒]</p>  | <p>DVD の英語、英語遊びのときの母親の英語を集中して聞ける。英語を聞くときリラックスしている。母親の絵本の読み聞かせや、母親との英語遊びを楽しむ。</p> | <p>あいさつなど英語の受け答えが自然にできる。DVD や母親の英会話を小声でシャドーイングできる。What's this? に対して It's a ... とフルセンテンスで答えられる。自分の好きな物などを質問されると this で即答する。答えに迷うときは I don't know. と言う。</p> |
| <p>■4歳 E[男児]</p>  | <p>DVD を集中して見る。母親と英語遊びを楽しむ。色の dark と light の違いが分かる。楽しくなると日本語でコメントする。</p> | <p>あいさつなど英語の受け答えが自然にできる。英語の歌を上手に歌える。英語遊び中、困ってしまい Oh, no! と言って気持ちを表現した。What's this? に対して It's a ... とフルセンテンスで答えられる。I have ... の文も言える。</p> |

表1(続き) 就学前幼児の英語力の観察記録

| | | |
|---|--|---|
| <p>■5歳 F[男児]</p>  | <p>日本語と英語の違いに気付いている。単数形や複数形の説明をする。昆虫などの英単語を正確に理解しており発語できる。DVDを集中して見られるが、母親、弟との英語遊びが特に楽しむ。CD-ROMの語彙クイズを楽しむ。母親に英語を教えられるのが苦手。自分の知っている英語を母親に教えたがる。</p> | <p>あいさつなど英語の受け答えが自然にできる。自分から英語で質問できる。「What do you have?っていつてな」と母親に頼める。What's this? に対して It's a ... とフルセンテンスで答えられる。I have ... の文も言える。母親に促されなくても、絵を見ながら知っている英語を思い出して発語できる。母親がそれを真似して言うこともあった。数字は、hundred が言えた。Because 文を繰り返し言うことができる。</p> |
| <p>■5歳 G[女児]</p>  | <p>CD-ROMの語彙クイズを楽しむ。時折難しさを感ずるときは目配せをして母親に助けを求めらう。好きなDVDのコーナーを選び、繰り返し見る。ダンスの歌が流れると母親と踊ることもある。</p> | <p>好きな英語の歌を歌う。分からない英語があると「○○ってなに?」と聞ける。</p> |

2.2 考察

① 全体的に、どの年齢の子どもたちも、英語であいさつなどのやり取りが自然にできていた。中でも、「Hello.」に対して「Hello.」、「Here you are.」に対して「Thank you.」は定着していた。「What's your name?」に対してフルセンテンスで「I'm ○○.」と答えることができた。さらに、親に英語で「Do you want to play?」などと声を掛けられると、「Yes!」「Yeah!」「OK!」などの英語で応答していた。英語遊びをしていたとき、困った状況に陥ったとき、「Oh, no!」という言葉が口をついて出た。このことから、年少者であっても、対人型の状況下で使われ、自分にとっても馴染みのある定型の会話表現や意思表示であれば、家庭内の親子の英会話体験を通じて、英語を習得し使えるようになることが分かる。注目したいのは、幼い子どもでも、言葉の意味を状況に合わせて学んでおり、習ったものを即座に使っているということである。幼い子どもでも、質的に意味のある英語を習い発語することができる。幼い子どもにも英語を教える際は、単に暗記させるのではなく、習った英語を、英語遊びなどで使わせることが効果的であることが分かる。

② 質問文、例えば「What's this?」や「What do you have?」に対して、年少者は単語で応答し、年長者になると文の形で応答していた。年齢が上がるにつれて、単語から文へと長くなる傾向があった。その理由としては、幼い子どもは、認知的に多量の言葉を操る

ことができないこと、フォーマルな文表現に馴染みがないこと、さらに、日本語と英語の語順の違いに慣れていないことなどが挙げられる。例えば、英語では‘What’s this?’ に対して、文で答える場合、語頭でまず‘It’s a ….’と主語＋述部を言わなければならない。一方、日本語では主語を省略し単語で‘…です」と答える。‘Why?’ に対しては **Because** で答え始めるが、日本語では‘…だからです」のように、**Because** にあたる言葉が文末に置かれる。実際、3歳の学習者 B は、‘Pretty because.’と発語していた。これは、日本語の「きれいだから」の語順を英語に置き換えていた様子がうかがえる。質問文に関して言えば、年少者のうちは、応答文に比べ、質問文の発語自体が少ない。これは、普段の日本語による親子の会話のやり取りの中で、通常子どもは親の質問に答える側に置かれているためではないだろうか。成長して、日本語でも質問する側に立てないと、子どもにとって英語で質問できるようになるのは難しいだろう。幼い時期は、単語で応答することが多いが、よりフォーマルな文の形で応答できるようになるまで、また、質問自体をできるようになるまで、成長を追って、根気強く継続的に支援し続ける必要があると思われる。

③ 年齢的に見てみると、子どもたちは、どの年齢でも、**E-Toy** を使った英語遊びの中などで、親と自然に英語のキャッチボールができていたが、その一方で、それぞれの年齢による英語の発語の特徴が見られた。3歳の2人の学習者たちは、1歳で英語学習を始めたが、他の年齢の子どもたちと比べて、単語の発声量が多かった。また、非文だが英語のように聞こえる文の発声があった。A はミニテストで英語で24まで数え、B は **CD-ROM** の名詞の単数形と複数形のコーナーで、親がクリック操作して単語の音声がかかると、次々に真似して発声することができた。以前と比べると、3歳になった彼らは、学習者としての集中力が備わり、意味を意識しながら単語を発声しているように見えた。4歳の学習者たちは、2歳から学習を始めていたが、3人中2人¹⁾に、コミュニケーションストラテジーや学習ストラテジーを使っている様子が確認された。D は、質問に対して‘**This**’を使って効率良く答えるコミュニケーションストラテジーを使っていた。E は、英語の歌が上手で、歌うことによって、英単語の発声が増え、英語を楽しんで学ぶ学習ストラテジーを用いていた。一方、5歳の2人の学習者たちは、文の形で応答や質問をするようになっていた。しかしながら、彼ら2人の学習者の英語の産出量は対照的だった。F は親に英語で質問文を教えて、それを使って自分に質問するように頼んでいた。また、絵を見れば自動的に次々に英単語を発声し、親がその後について繰り返し言うほど、英語を多量に発声していた。しかしながら、G はあまり英語を発声することはなかった²⁾。G の英語の発声は好きな歌を歌うときや‘○○(英語)ってなに?’と質問をするときが多かった。英語の理解力に関しては、両者とも、**CD-ROM** を使った学習で、ほぼ全問クイズに正解しており、同等の優れた理解力があつたと考えられる。以上をまとめると、今回の調査では、発語に関しては、20ヵ月ほど英語に触れ親子で遊ぶ体験があれば、3歳では単語を多く発語し、徐々に文を発声し始め、4歳ではバイリンガルとしてコミュニケーションや自分の好みによって効率良く英語を操作するストラテジーを使うことがあり、5歳では発語し続けるタイプと、発語をしなくなるタイプに分かれる特徴があつた。

④ 年齢が上がり、認知力が増すのに伴い、**DVD** や英語遊びの集中力が増加し、より多くの英語への接触に耐えられる様子がうかがえた。特に、幼稚園入園などで集団生活を開

始する3歳児は、学習者として機能し始めるように見えた。3～5歳の学習者全員が、単語の意味を親に聞かれる様子や CD-ROM の語彙クイズなどを使っている様子から、年少者も年長者も、教材の様々なメディアで繰り返し取り上げられていた頻出度の高い重要語彙を着実に習得しているように見えた。特に、自分が興味のある事物について、英単語の習得が順調に進んでいた。一方、自発的な英語の発語となると、ほとんどの学習者が、英語に豊富に接触できる DVD や CD-ROM を使っているときよりも、英語が出ない E-Toy を使って親子で英語遊びをするときの方が多いたのが印象的だった。DVD では、フォニックスのコーナーや歌のコーナーで英語音を楽しそうに発声することがあったが、親と行う英語遊びの方が圧倒的に英語の発声量が多く、会話表現を口にしていった。理由のひとつとしては、子どもはアナログ的な学習者であり、対人的な言語習得活動に適應できる (Kuhl, 2007) ので、親と言葉を交わし合っている方が子どもの発声が増えることが考えられる。また、遊ぶために、英語を使わなければならない必然性が、子どもの英語の発声を促したと考えられる。英語の受容力は、DVD や CD-ROM で何度も聞くことで比較的身につくが、産出力は、対人式の状況で、子どもが、「発語してみたい」「発語しなければ」と本気で思えるような状況を作り出す必要があるようだ。

3. 「母語力」「親の支援」との関係

子どもが習得する英語力に関係するものとして「母語力」と「親の支援」に注目した。バイリンガルの2つの言語の関係を説明したカミンズの「二言語相互依存説」(Cummins, 1984) を参考にして考察する。この説は、表層では、バイリンガルが産出する2つの言語力(第一言語と第二言語)が、水面上では別々の氷山が存在して見えるように無関係のように思えるが、深層の水面上では2つの言語力はつながっており、互いに依存し合っているというものである。2言語が共有する部分には、「言語で思考する能力」(＝学術的言語能力)があると考えられている。この能力は、認知力の一部と考えられており、幼少時には、育ててくれる親と母語(第一言語)で有意義なコミュニケーションをすることで、社会性の発達、情緒面の発達と共に、この知的言語力の素地が築かれると推測される。

3.1 母語力との関係

今回の調査で、1～3歳の間に英語学習を始め、親子で20ヵ月間英語を学んだ子どもたちは、英語で話しかけられるとごく自然に英語で応答することができるようになっていた。同時に、筆者(日本語母語話者)は、子どもたちの日本語の発達が健全であるという印象を受けた。英語学習による障害はまったくなかった。発音と会話力、共に問題はなかった。むしろ、日本語の会話力で興味深く思ったのは、自分の感想や考えを述べる独り言のような発語が比較的多かったことである。さらに、子どもたちのこのような日本語の発語は、英語学習時の英語の発語に混ざることがなかった。

例えば、親子でオールイングリッシュの DVD を見ているとき(例:「つぎはきいろいのがくるんだよ」)、英語の絵本を読んでいて親がお話の筋を日本語で補足説明するとき(例:「ああよかった、あかちゃんがみつかったんだね」)、英語遊びで親が日本語で遊びのルールを教えるとき(例:「これやってみたかったんだ」「こうなったらだめね」)などだった。また、

子どもは、親に英語で話しかけられると英語を使っていた。親が日本語で英語の説明をし、英語を言って聞かせるときも、素直にそれを真似ていた。まるで、親子の間で、「英語(学習)をするときには、英語を使おうね」という暗黙の約束があるかのような感じだった。同時に、親は子どもが日本語を使うのを禁じなかった。子どもは、何気ない自分の気持ちや感想を述べるとき、困ったとき、日本語が思わず口をついて出てくるような感じだった。親は、そんなときは、「日本語を使ってもかまわない」としている様子だった。

子どもたちの独り言は、3歳より前に遡る。日本語の発音がまだ不明瞭な2歳後半の頃から既に観察されていた。子どもたちは、自分が感じた気持ちや感想を、親に聞かせるためというよりも、無意識に自分でつぶやいている様子だった。調査者は、その特徴から、英語学習時の子どもたちの独り言は、L.S. ヴィゴツキー(1934)が唱えた「自己中心語」のようなものだったのではないかと考える。彼は、「自己中心語」は「内言」(=思考や行動を支え調整する言葉)の前段階であると説明した。それは、幼児に難しい課題を与えると増加する傾向があり、このような思考や課題解決を支える自己中心語は、やがて声として発されることがなくなり、やがて内化して内言となると考えた。ちなみに、内言に対して外言は、他者に向けられる言葉であり、社会適応のために用いられるものとして区別される。

対人的コミュニケーションには、状況に合わせて使われる挨拶のようなもの(例:「こんにちは」「ありがとう」と、相手の顔が見えていても自分の側にのみ情報があり理解しやすいように伝える工夫をしなければならないもの(例:自己紹介、プレゼンテーション)がある。前者に比べて、後者の方が、やり取りをする内容の認知的な負荷は大きく、将来的には、このレベルのコミュニケーション力が、読み書き能力の習得を促進する可能性がある。今回調査された子どもたちの日本語による「自己中心語」は、子どもの気持ちや考えのつぶやきであったが、内容的に自分側の情報を発したものであることから、後者の会話力の素地的能力ととらえてもよいのではないかと、筆者は考える。日本語でしっかりと自己中心語を発することができていたので、今回の早期英語学習幼児たちは、今後、日本語のより高度な会話力、さらには読み書き能力の発達には問題がないだろう。また、日本語の読み書き力は、英語の読み書き力と相関があると考えられるので、早期英語学習で刺激を受けて生じた日本語の「自己中心語」は、日本語の読み書き能力を促進し、さらに、将来的に、英語の読み書き能力の習得を促すものとも考えられる。

一方、英語力に関しては、発音はネイティブライクで、会話力も対人的コミュニケーションで挨拶のようなチャンク的なもの(例:‘Okay.’ ‘Hello.’ ‘Here you are.’ ‘Thank you.’ ‘I don’t know.’)は状況に応じて自然に発語されていた。これは、子どもの英語学習の支援者であった親たちが、英語教育の専門家ではなく、日本語が優勢な日本人母語話者だったことを考えると興味深い結果である。その一方で、しかしながら、日本語ではよく観察されていた「自己中心語」は、英語で発されることはほとんどなかった。これは、子どもたちにとって日本語が母語であり、情緒的に英語よりも日本語の方が自分の気持ちや感じたことを発しやすい言語であったことが理由のひとつとして考えられる。だが、親との英語遊びの中で、状況に応じて英語を使う体験を通して、考える間もなく適切な英会話表現を発する能力を獲得したように、今後の英語学習活動において、ネイティブなどが自分の気持ちや考えを発言する英語に親しみ、自分なりに英語でつぶやき、他者に対して英語で発言するな

どの体験を積みめば、徐々に、英語を使って気持ちや考えを発信できるようになるのではないだろうか。親子の家庭学習の中でも始められることはある。例えば、『Worldwide Kids English』DVD教材には、日常的に子どもが身近に体験する困った状況(例：他の子どもが使っている遊具で遊びたいが言い出せない状況)において、ネイティブの子どもたちが問題解決方法を、つぶやくように考えながら発言するコーナーがある。親子で、同感しやすい同年代の子どもたちの英語のコメントを聞き、それを真似することなどは今からでもできることだろう。

まとめると、日本で育ち、家庭において親子で英語学習する幼児の場合は、母語である日本語が社会の中で主要言語として使用されており、日本語への接触が量的に十分に保証されているので、家庭において親子間で日常的に日本語の会話ができているとすれば、子どもの日本語の発達は質的にも、まったく問題がないと考えられる。日本語の読み書き能力が正常に発達するのだから、英語の読み書き能力の習得も問題ないだろう。一方、幼児期に、日本語の会話能力も正常に発達しており、同時に英語の会話表現を口にすることができていれば、将来的に、英語の会話にも堪能なバイリンガルに成長する可能性が見込めるのではないだろうか。中島(1998)は、「二言語発達のカウンター・バランス説」を提示し、日本でバイリンガルを育てるには、母語のバイタリティが高いのだから、例えば、学校で教科科目を学ぶ時間などを作り、有意義な英語への接触量を増やせば、英語も伸び日本語も伸びるのではないかと述べている。その開始時期を、就学前に早め、家庭内で親が子どもと英語遊びをする時間を設けて、子どもにとって楽しく有意義な英語学習活動を行えば、今回の調査で観察されたように、英会話能力の素地を築くことができ、これが将来、英語の読み書き能力の土台に活かせるのではないだろうか。

今回の調査で英語学習をしていた子どもたちには、多様な英語教材と親の支援により英語への接触量が豊富にあった。筆者は、その教材を用いた子どもたちの学習の様子を見ると、それぞれの年齢で最大限可能な英語学習が行われていたように思う。年少者は、単語の発声量が、他の年齢の子どもたちに比べて多かった。彼らは、言葉の意味よりも音に対して純粋で、英語が聞こえると体を揺らし、気に入った英語を口にしていた。絵を見て音を聞き、意味が何となく分かると、上手に英語を真似ることもできた。もちろん、このように無邪気な発声が起こるためには、教材で扱われている内容が、子どもたちにとって認知的に楽しめるものでなければならない。その点、『Worldwide Kids English』の教材は、子どもの認知力の発達段階や興味に合った内容をうまく取り入れており、子どもたちが、母語で習得した知識などを第二言語にポジティブにトランスファーできたのだと考えられる。英語圏で制作された英語教材でも、日本人の子どもたちには文化的に理解しにくく、特別な教養や思考力が求められるようなものでは、このようなトランスファーは起こりにくいだろう。

さらに、今回の調査では、3歳になると、日本語を使って質問ができるほど、学習者として確立してくる様子、また、4歳の学習者は、コミュニケーションストラテジーや学習ストラテジーを使うという年齢別の興味深い学習行為が観察された。特に、4歳児は、2歳から英語学習を開始していたが、活発に英語を真似て発声していた3歳の時期を経て、英語を使うコミュニケーターとして、また英語学習者として、個性を見せていた。ある者は、‘This’や‘I don’t know.’を使って効率良く応答し、ある者は、英語の歌を歌うのを楽しみながら

学習していた。母語力や認知力がより高くなる5歳児になると、英語の意味面での学習効率が上がった。母語によって自分を取り巻く世界の事物に関する意味が分かっているため、英語で相当するものがあれば、ラベリングによって効率よく習得している様子だった。ただ、気になったのは、5歳の時点で、英語を発声する学習者と発声しない学習者に分かれる心配があったことだ。受容面では、学習者は2人とも英語力は発達していたが、そのうちひとりの発声は徐々に少なくなっていた。これは、親が英語を使う量に関係しているように思えたが、学習者側の理由としては、先に述べた「自己中心語」が「内言」と関係しているように思えた。日本語が思考言語として英語に比べてはるかに優勢となり、英語を圧倒するためだろうか。英語を口にしない時期が就学前に訪れるのであれば、英語の音を純粋に体感し真似することが楽しいと思える幼少の時期で内言が活発になる3~4歳より前に、英語に親しみ、英語音を口ずさんでおいた方が、将来的に、英語の発音面では有利だろう。通常日本では母語である日本語が健全に発達するだけに、英語力を付加的に習得できる可能性がある。幼少の頃から、子どもの年齢にふさわしい英語学習を行うことは支障がなく、むしろ将来的に有望であると思われる。

3.2 親の支援との関係

今回調査した子どもたちは、20カ月に渡り、親子で英語学習を行い、あいさつなどを英語で自然に交わすことができるようになっていた。印象的だったのは、どの年齢でも、親が英語で声を掛けると、子どもが必ず英語で応じる姿だった。‘Do you want to play a game?’と聞かれると、‘Okay!’や‘Yeah!’と答えていた。‘What’s this?’と質問されると、それが何かを考え英語で答えていた。また、親が英語で繰り返して聞かせると、子どもは指示されなくても、自然に英語を繰り返していた。一方、親子間でコメントを交わす場面や、子どもが分からない英語を親が説明する場面で日本語は使われていた。このように、日本語と英語の使用場面が区別されていた。今回の調査で、子どもたちが、自然に英語を発声することができていたのは、もちろん、親が英語を使っていたことは言うまでもない。しかし、その英語は、流暢な英語というよりも、子どもに分かりやすくジェスチャーや声の調子を工夫したものであったこと、また、親が日本語を禁じず、むしろ英語学習に活用して、英語遊びを子どもが楽しめるように工夫していたことは注目に値する。

驚くべきことに、英語をよく発声した子どもの親の自己評価は、必ずしも英語が得意ではなかった。しかしながら、彼女たちは、親子で英語学習をするときは、愛情を込めて、積極的に英語で子どもに声掛けをしていた。できるかぎり文単位で発声し、子どもの目線に立ち、子どもが英語を理解しやすく楽しめるように、英語を「体感・体験させる」タイミングを察知し、それを活かす優れた工夫をしていた。例えば、英語を聞かせながら、絵や玩具教材など具体的な物を指さし、握らせて、それが何を意味するのかを教えていた。細かな意味を教える場合は、日本語を使い、子どもの実体験を思い出させて、説明をしていた。英語の絵本を読み聞かせるときでさえも、おいしそうな食べ物の絵があれば、‘Yummy! Yummy!’と言いながら、その絵を手ですくう仕草をして、子どもの口元に運び、一緒に味わってみせた。子どもが眠そうにしている時、そのタイミングを捕らえ、‘Are you sleepy?’と優しくたずねると、子どもは‘Yes.’と答えていた。機能語の‘In’と‘Out’の意味を理解させ

るときも、カーテンを引いて親子で中に入り‘In!’、カーテンを払って‘Out!’と言って、その違いを体験させていた。子どもたちにとっては、英語学習より前に、親がいろいろな物や絵を使い、言葉を体験させてくれるのが楽しいようだった。親はそんな子どもの反応を見るのがうれしいようで、親子の英語活動は、笑顔があふれていた。バイリンガル児を育てるには、インプット提供者が、子どもの成長の変化に敏感で、具体的な活動を提供し、学習者と関わるのが大切である(e.g., Wong Kwok Shing, 2006)とされているが、今回の調査では、そのような場面が数多く目撃された。

また、親の声掛けにも工夫があった。子どもに言葉を教える典型的な会話フォーマットとして「注意喚起→質問→命名→フィードバック」が効果的だとされるが、英語の発語が多かった子どもの親は、これを英語で行っていた。例えば、‘B-chan! Look, it’s pretty. What’s this? It’s a pink hat. ピンクの帽子ね。A pink hat.’という具合である。まず、ワクワクした声で、教えたいものに注目させ、これは何かしらと質問を投げる。次にその答えを言って聞かせる。日本語で意味を聞かせてから、最後に、再び英語の答えを繰り返して聞かせていた。このように、親が、最後の部分を、日本語で終わらせず、再び英語を繰り返し聞かせていたので、子どもは意味を知った上で、耳に残った英語を真似して発声することができていた。日本語を間にはさんでも、最後を英語で締めれば、子どもはその英語を聞いて、意味を思い出し確認しながら、発声練習ができるというわけである。その他、特に年少者の場合、子どもが発語した内容に関して意味を詳しく説明し、子どもが理解しやすいように子ども言葉に調整して聞かせるなどの工夫も見られた。年長者の場合は、子どもが英語を言うとき‘Yes, ○○.’のように子どもの後について英語を繰り返して言って正しいことを確定し、子どもを安心させていた。

親が英語学習支援に熱心で、子どもを英語で褒めていたのも印象的だ。ガイドブック、時には辞書で、英語の発音や意味を調べていた。褒め言葉は簡単な英語であるが、‘Good job!’ ‘That’s great!’ ‘Wonderful!’ など英語のポジティブな声掛けが多かった。興味深いことに、親の英語は、ステージを進むごとに発音がネイティブライクになっていった。未知なるものを学習しようとする親の前向きな姿勢や子どもを褒めて学習の成果を共に喜び合う親の温かな態度は、子どもの英語学習の原動力となっていたように思う。英語学習は長い旅路だが、親子で楽しく英語遊びをしたという体験が、今後の彼らの英語学習の大きな支えになってくれるものと確信する。

注

- 1) もう1名(C)は学習を夜に行う傾向があり、疲れのためか子どもの発声量が少なかった。
- 2) 他の親子と比べて、E-Toyを使った英語遊びよりも、CD-ROMのクイズが好きな様子だった。

参考文献

- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Kuhl, P. K. (2007, January). Is Speech Learning “Gated” by the Social Brain? *Developmental Science*, 10, 110-120.

Wong Kwok Shing, R. (2006, October). Enhanced English among Second Language Learners: The Pre-School Years. *Early Years: An International Journal of Research and Development*, 26 (3), 279-293.

L.S. ヴィゴツキー 1934. 柴田義松（訳）『思想と言語』明治図書.

中島和子 1998. 『バイリンガル教育の方法——地球時代の日本人育成を目指して』アルク.